

品上博士の大真面目な研究



ビンタこと鈴木敏多がTRS研究所の職員となって十数年の歳月が経過していた。彼の他にもう一人、博士にとって貴重な協力者がいた。テロス本部から時折遊びに来るラミウザこと嶋野聖香であった。

「博士、博士～、お久しぶり～」

彼女はいつも、何の予告もなしに現れる。

「いやあ、聖香くん、本当に久しぶりだねえ」

「それにしても、あたしら長い付き合いだけど、博士って十年前と全然変わらないわね。不気味だわ」
面と向かって「不気味」と言うってしまうのが、聖香の真骨頂である。

「君の方こそ変わらないじゃないか」

「そりゃあわたしは……改造人間だから……」

さしものラミウザも目を伏せて口籠った。

「それよりも博士、研究の方は進んでるの？」

聖香はすぐに気を取り直して話題を変えた。

「よくぞ聞いてくれた。……ティア、こちらへおいで」

部屋の隅に立っていたアンドロイドが二人のところへ歩いてくる。

「歩き方が随分スムーズになったわね！」

聖香が驚きの声を上げた。

「マシンの作動音もほとんど聞こえないし、これなら普通に街を歩いても、近寄って顔を見なければロボットだなんて、誰も気付かないでしょうね、きっと」

聖香はティアの顔をまじまじと見つめた。

「このコの顔、なんだかあたしに似てない？」

「そりゃあそうさ。君の表情とかを参考にさせてもらってるからね」

「じゃあ、ちょっと笑ってみて」
ティアが言われた通りにすると、聖香は渋面になった。
「ひどいわね〜。引き攣ってるだけじゃない。アンタも女の端くれなら、笑顔一つで男をコロッと参らせるくらいの芸当を身に付けなさいよ」
「参らせる……ですか？ 理解不能です」
ティアは無表情に言った。
「ははは……余計なことを言ったあたしが悪かった」
聖香は今度はティアの身体を眺め回した。
「ほほう、なかなかナイスバディだね」
ティアが着ているセーターの襟を引っ張って中を覗き込んだ。
「あたしにもこれくらいのおっぱいつけて欲しいわよねー」
聖香は服の上からティアの胸の膨らみを撫でたり擦ったりした。
「あの……やめてください……」
「なによ、アンタ。いっちょ前に感じてんの？ 高性能じゃない！」
聖香は面白がった。



「と言うか、そのシステム、ラミウザにも使われてるんだけどね……」
博士が口を挟んだ。
「へえ〜、そう？ でもさ、これで顔が赤くなったりしたら完璧だよな。……どう、気持ちイイ？」
聖香はティアの腰から尻に手を滑らせた。
「気持ちいいです……」
全く気持ち良さそうでない口調と顔つきのティアである。

「顔を赤らめる機能か……確かに欲しい機能だね」
何を想像しているのか、博士は鼻の下を伸ばしていた。



「研究テーマは幾らでもあるもんだねえ」